審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2924 号	氏名	猿田 寛
審査担当者	主 査 島村 拓司 (印) 副主査 緒方 裕 (印) 副主査 矢野 博久 (印)		

主論文題目：
Hematopoietic stem cell transplantation in advanced cutaneous T-cell lymphoma
（進行期皮膚T細胞性リンパ腫における造血幹細胞移植）

審査結果の要旨（意見）

本研究では非常にまれな疾患である進行期皮膚T細胞性リンパ腫5例のうち化学療法が効果を認めた原発性皮膚未分化大細胞リンパ腫および原発性皮膚CD8陽性進行性表皮向性細胞傷害性T細胞リンパ腫に対し自己造血幹細胞移植を、菌状息肉症(セザリー症候群)3例に対し同種造血幹細胞移植を行い良好な結果を得ることができた。このような症例はなかなか十分な症例数の蓄積ができず研究として成り立ちにくいものであるが、著者らが進行期皮膚T細胞性リンパ腫に対する造血幹細胞移植の有効性を証明したことで、今後の臨床においてもきわめて重要な役割を果たす報告と考える。

審査に当たり、研究内容に対する質問にも著者から的確な回答が得られた。よって、この論文は充分に学位に値するものと考えられた。

論文要旨

進行期皮膚T細胞性リンパ腫の治療は主に化学療法を行うことが多いが、効果は限定的であり予後は悪い。菌状息肉症やセザリー症候群に対する造血幹細胞移植の適応は確立されていないが、唯一長期間の寛解を期待できるのは同種造血幹細胞移植であり、難治症例に対して小数例の報告がある。

久留米大学病院で2004年から2015年に造血幹細胞移植を受けた皮膚T細胞リンパ腫患者5名の2016年3月までの臨床データをレトロスペクティブにレビューした。化学療法が奏効した2人の患者（原発性皮膚未分化大細胞リンパ腫および原発性皮膚CD8陽性進行性表皮向性細胞傷害性T細胞リンパ腫）は、自己造血幹細胞移植を施行しPRが1例、もう1例は治療が奏功しCRを得たが二次性の急性骨髄性白血病で死亡した。残りの3例は菌状息肉腫またはセザリー症候群であり、同種造血幹細胞移植を行った。病状進行のために菌状息肉腫患者1例が死亡したが、残りの2例の患者はCRで現在も生存中である。この研究では2人の死亡があったが、結果は満足のいくものであった。